第１節　市民センターでの子育て支援と親育ちプログラム

岩　丸　明　江（Ⅰ．市民センター館長調査結果　子育て支援について）
古　野　陽　一（Ⅱ．NP プログラムの紹介と九州一円でのひろがり）

北九州市の子育て支援は、全市―区―各小学校区（市民センター）と３層構造で取り組んでいる。その地域での子育て支援に関する市民センター館長の回答から、いくつかの視点を提示し、そうした地域での居場所づくりと連動すべき親育ちプログラムについて紹介する。

Ⅰ．市民センター館長調査結果　子育て支援について

１．子育て支援に関する館長への調査結果

(1)　市民センターへの親子の来訪者数

表１　フリースペースへの平均来訪者数

平均来訪者数（人）／月	
１．　0～19人	47
２．20～49人	12
３．50～100人	11
４．101～150人	1
５．151～300人	3
６．300人以上	3
７．不明	1
	78

フリースペースとは、（様々な形態はあるが）「時間内であれば、いつでも気軽に行き、帰れる親子の居場所」である。月に１回の場合もあれば、４回の場合もある。なにかの企画がついていることもあれば、無いこともある。また、館によっては、全館で終日親子がすごす姿をみることのできる館もある。基本的には、現在市民センターには、乳幼児親子のための空間を整備しているところが多いので、本来は、親子がぶらっと遊びにいくことも可能な場所のはずである。その月平均の来訪者数を問うと、表１のようになった。

「１・２の０～49人」は、毎日の平均が１，２人ということになる。「6.300人以上」の館の中には、1,062人、1,100人という館もある。（この設問は、フリースペースの平均来訪

表２　平均来訪者数と館長の性別

平均来訪者数（人）／月				
×性別		女性館長	男性館長	性別不明
Ａ群（１＋２、０～49人）	59	19	35	5
Ｂ群（３＋４、50～150人）	12	8	4	
Ｃ群（５＋６、151人以上）	6	3	3	
不明	1		1	
	78	30	43	5

者数に限ったので、サークル時の来訪者数ははいらないことになる)。

また、平均来訪者数を、A群（1，2の合計)、B群（3，4の合計)、C群（5，6の合計）にして、館長の性別についてクロス集計すると、表2のようになった。もちろん、フリースペースという形でのみ、親子が館に来訪するわけではなく、育児サークルや乳幼児相談など様々な機会はあるが、「気軽にぶらっと来る」という点で、来やすい館なのかどうかひとつの指標になると思われる。性別については、女性館長の場合、30人中11人（36.6％）がB，C群で、フリースペースという形で親子が来訪しやすいよう工夫している。一方、男性館長は43人中、35人（81.4％）がA群にとどまる。

表3　平均来訪者数と館長の前職

平均来訪者数（人）／月						
×前職		役所関係	学校長等	民間企業等	その他	無回答
A群（1＋2）	59	23	14	10	11	1
B群（3＋4）	12	3	3	1	4	1
C群（5＋6）	6	2	2	1	1	
不明	1	1				
計	78	29	19	12	16	1

また、館長の前職との関係をみると、「その他」が16人中5人（31.3％）がB，C群である。その他にはどのような職種がはいるのかははっきりしないが、他の前職に比べて高い。

表4　平均来訪者数と館長任命の経緯

平均来訪者数（人）／月							
×任命の経緯		役所ＯＢ	学校関係	社会教育関係	元館長	その他	無回答
A群（1＋2）	41	16	12	8	1	2	2
B群（3＋4）	9	2	3	4			
C群（5＋6）	4	2	1	1			
不明	1	1					
計	55	21	16	13	1	2	2

表4は館長の任命の経緯との関係をみた（任命された館長のみの数字なので、総数が少ない)。ここでは、社会教育関係者の38.5％がB、C群と、役所ＯＢの20％、学校関係者の25％よりも高い。

(2)　サークルの有無

次に育児サークルの中でも、自主サークルに注目した。子育て中の親たちがつくる自主サークルは、親たちの主体的な活動として大変重要な場である。自主サークルは、「有り」が36館、「無し」が42館だった。

表5　自主サークルの有無と館長の性別

サークルの有無		×館長の性別		
	計	女性	男性	不明
無	42	12	27	3
有	36	18	16	2
計	78	30	43	5

次に自主サークルと館長の性別の関係をみると、女性館長の場合、30人中、18人の館（60.0％）で自主サークルがあるが、男性館長の場合は43人中16人と37.2％にとどまる。サークルの支援は新新子どもプランの内容でもあるが、性別による注目度の差はあるようである。

表６　自主サークルの有無と館長の前職

サークルの有無						
×前職		役所関係	学校長等	民間企業等	その他	無回答
無	42	18	8	8	8	
有	36	10	11	4	9	2
計	78	28	19	12	17	2

自主サークルの有無と館長の前職については、サークル有りが学校長等の19人中11人（57.9％）、その他が17人中９人（52.3％）、役所関係が28人中10人（35.7％）、民間企業等が12人中４人（33.3％）であった。

表７　自主サークルの有無と館長の任命経緯

サークルの有無							
×任命の経緯		役所OB	学校関係	社会教育関係	元館長	その他	無回答
無	24	13	5	4	1		1
有	23	6	9	8			
計	47	19	14	12	1	0	1

自主サークルの有無と館長の任命経緯については、唯一役所ＯＢの館で、自主サークルがないところが多い。有るのは、社会教育関係が12人中８人（66.7％）、学校関係が14人中９人（64.3％）に対して、役所ＯＢは19人中６人（31.6％）にとどまる。

(3)　子育てサポーターについて

ここでの子育てサポーターとは、教育委員会登録の子育てサポーターのことを問うている。子育てサポーター制度とは、地域で子育てを支える人材（子育てサポーター）を養成し資質向上を図るとともに、子育てサポーターが活動をしやすい環境を整備するため、平成16年度に確立した制度である（文部科学省委託事業　家庭教育支援総合推進事業）。平成17年度報告書「子育てサポーター　まなびのあしあと・Ⅱ」によると、登録者数は469名にのぼる。せっかく登録された人材を活かすための活動をしやすい環境づくりは重要な課題であり、そもそも要項には、市民センターに所属し、館長の要請に基づき活動に参画することとなっている。したがって、子育てサポーターの活動環境の向上は館長の意識にかかっていると言っても過言ではない。

子育てサポーターが館で何人活動しているかは、市の施策にそって、人材をどのように活かしているかの指標とみることができる。ただし、実際は、サポーターが登録している館は地元であることもあるし、居住地ではない館であることもあるので、いない場合もある。しかし、館長としては、各区での子育てサポーター養成講座への参加の呼びかけを、

積極的に働きかけることも可能なので、実際に０人である場合は、子育てサポーター制度の構築に積極的であるとは言えない。下記の表のように、１～４のグループにわけ、考察してみた。

表８　子育てサポーター数と館長の性別

子育てサポーター数				
×性別		女性館長	男性館長	不明
１．0人	22	3	16	3
２．１～３人	26	11	14	1
３．４～７人	23	12	10	1
４．８～15人	7	4	3	
計	78	30	43	5

子育てサポーターが０人なのは、女性館長は30人中３人（10％）であるが、男性館長は、43人中16人（37.2％）である。また、サポーターが４人以上と有る程度、子育て支援の仲間ができる館（３，４グループ）についてみると、女性館長は実に30人中16人と半数以上である。女性館長は子育てサポーターのボランティア・コーディネートにたけているとみることができる。

表９　子育てサポーター数と館長の前職

子育てサポーター数						
×前職		役所関係	学校長等	民間企業等	その他	無回答
１．0人	22	13	7	1	1	
２．１～３人	26	9	3	8	6	
３．４～７人	23	3	7	3	8	2
４．８～15人	7	3	2		2	
計	78	28	19	12	17	2

前職との関係でみると、子育てサポーターが０人なのは、役所関係の館長が28人中13人（46.4％）、学校長等が19人中７人（36.8％）に比べ、民間企業出身は、12人中１人（8.3％）である。

表10　子育てサポーター数と館長の任命の経緯

子育てサポーター数							
×任命の経緯		役所OB	学校関係	社会教育関係	元館長	その他	無回答
１．0人	19	9	6	2	1		1
２．１～３人	14	7	3	3		1	
３．４～７人	15	3	5	6		1	
４．８～15人	7	2	2	2			1
計	55	21	16	13	1	2	2

子育てサポーター数と館長の任命の経緯をみると、サポーターが０人なのは、役所ＯＢの中で21人中９人（42.9％）に比べ、社会教育関係者ではわずか13人中２人（15.4％）である。もともと館長に任命される社会教育関係者の中には、子育てサポーター制度の構築に社会教育主事として参画してきている方もおり理解も深い。子育てサポーターの活動環

境の充実に積極的なのは必然ではあるだろう。

2．子育て中の親子の居場所と市民センター

(1) 人とつなぐ存在としての館長の役割

以上、市民センターのフリースペースの来訪者数、自主サークルの有無、子育てサポーターの数を指標として、館長の子育て支援への取り組みの姿勢をみた。

男性館長は、来訪者数の少ないＡ群（月に０～49人）が81.4％であり、子育てサポーターの人材活用についてもサポーターが０人なのは37.2％を占めた。

女性館長のセンターは60.0％で自主サークルがあり、子育てサポーターのボランティア・コーディネートでも、53.3％がサポーター数４人以上と熱心さがうかがえる。

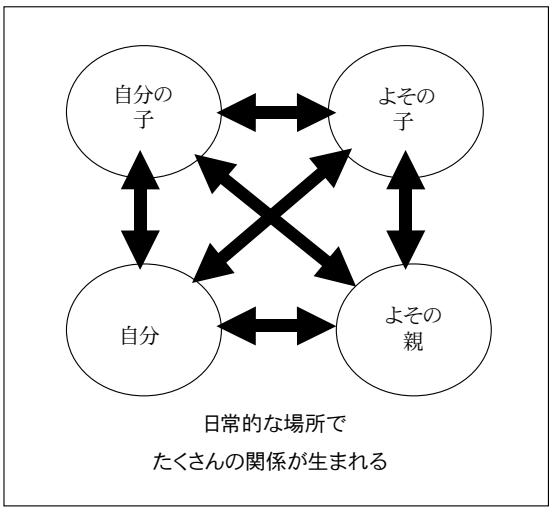
また役所ＯＢの館長は、自主サークルの有るのが、31.6％で他に比べ低く、子育てサポーターの活動が０人なのは、21人中９人（42.9％）と他に比べ高かった。

社会教育関係者の館長は、平均来訪者数が多いＢ，Ｃ群が38.5％、自主サークルの有るのが66.7％、また子育てサポーターが０なのは、わずかに15.4％であるなど、人をつなぐ上で力を発揮している。

市民センターでのハード的な整備に加えて自主サークルや、子育てサポーターなど、ソフト面の資源を大切にし、育成する力量は子育て支援の地域力を高める上で欠かせない。同じ館でも、館長の交代により、センターへの親子の出入りが活発になることもしばしばであることを考えれば、館長はまぎれもないキーパースンである。全市的な施策が３層構造の中で、市民センターレベルで効果を発揮するかどうかは、館長の取り組みの姿勢にかかっている。

(2) 親子にとっての市民センター

市民センターは、子育て中の親子にとっては、地域（の人や資源、情報）に出会える場所であり、乳幼児なんでも相談で保健師さんなど専門職と話せる場であり、子育て仲間を探せる場である。親と子、地域の人が集まるとき、そこには多様な関係が生まれる。右図は親子の関係に限っているが、これにさらに、地域の人が関わることになる。その出会いの場所がさらに、関係を育み、親の力をつけていく場所になるためには、可能であれば、様々な安心できるグループワークの場があることがのぞましい。親のつながる力、問題解決力を育てるのに、様々な親育ちプログラムが有効である。



3．親育ちプログラム

この項では、市内で実践されている親育ちプログラムを紹介する。特に、最後のＮＰプロ

グラムについては、実践数が多く、福岡県内で広まりつつあることも含めて詳細に報告したい。

(1) はじめのはじめの一歩セミナー

このセミナーは、対象を出産後まもなくの親子にし、できるだけ早い時期に地域の資源と出会い、孤立化を防ぎ、親としてのスキルをピア的（同じ背景を持つ人同士が対等な立場で話を聞き合う関係）な場面でつけていくプログラムである。臨床心理士もスーパーバイザーとして関わり、必要があれば、グループワークの際にファシリテーターのコメントの中にアドバイスやヒントもこめながら返していく。

・産後のストレスの最も高い時期に、人とつながり、ベビーマッサージ等を通して我が子を慈しむことで、育児に対する不安を少しでも取り除く。
・この講座に参加すると言う目的で、密室育児から外出への動機付けとする。
・参加者同士でグループワークをし→自主グループ化→地域資源と連携とステップアップしていく流れを作る

対象者は、第一子が６ヶ月までの親。ハイリスク層がターゲットだが、誰でもストレスを抱える時期なので、誰でも対象となる。プログラム内容は、２時間の中にベビーマッサージ、わらべ歌、グループワークで構成される。

このプログラム開発は、ＮＰＯ法人北九州子育ち・親育ちエンパワメントセンターが行い、平成18年度小倉南区で２回開催された。詳しい報告書は、平成19年度３月に発行される。

(2) ＭＣＧ（マザー・チャイルド・グループ）

これは、子育て中の親の中でも、なんらかのリスクを抱える親が対象になる。北九州市内では、以前八幡西区の保健師による取り組み、小倉北区でのＮＰＯ（高齢社会をよくする北九州女性の会）による実施例があり、平成18年度は戸畑区で保健師によって開催されている（事業名は　ＰＣＧ　ペアレント・チャイルド・グループ　親と子の関係を考えるグループ）。以下、ＭＣＧの概要について、全国いきいき公衆衛生の会サマーセミナー in 秦野分科会資料集～横浜市港北福祉保健センターの取り組み（平成14～16年度）より引用する。

対象は、グレーゾーンから軽度・中等度の虐待している母親を支援する。自分の人間関係や課題や子育ての悩みなどを順次話していき、同じ悩みの仲間と出会うこと、それから悩みを言葉にしていくというグループミーティングによって心が癒されるとともに、ひいては親子関係の修正をしていくということにつながる。自分が主体となり、他人への関わりを持とうとする場・自分への客観性を持ち、語っていいと思える場をつくる。力関係・上下関係で人との関係を見る母が、グループでは対等な関係を養う場となる。また自分の中で話の内容をコントロールできる。母達の持つマイナスの気持ちを聞く場であるため、言いっぱなし・聞きっぱなしの場であり安心感・安全感が大事であるとされる。

ＭＣＧを開始するにあたっての検討事項として、

☆誰でも入れる地域のサロンとは違うため、目的がずれないようにどう工夫するか。

（周知の仕方・対象者への会の説明のしかた・会の中での約束事等）

☆人格障害の人が入り、会を混乱させないための工夫

☆安心して話をする場にする為の工夫をどうするか

☆対象者をどう把握するか　などがある。

親育ちプログラムについては、実は、対象の特定、グループの構成や実施回数、ファシリテーターの問題など様々な要素が強く影響する。次項のＮＰプログラムは、カナダから導入されたもので、有る程度定型化されているが故にプログラムとしては、非常に安定的なものである。

(3)　ＮＰプログラム（ノーバディズパーフェクトプログラム　完璧な親なんていない）

カナダ生まれの子育て中の親の教育プログラム。対象は０歳から５歳までの子どもをもつ親で、養成された２人のファシリテーターの進行のもと、参加者がそれぞれに抱えている悩みや関心のあることをグループで出し合って話し合いながら、ときどきテキストを見て、自分にあった子育ての仕方を学ぶ。子育て、子育ち、親育ちに関係のあるテーマで参加者みんなで取り組めるものを、参加者の希望にあわせて、プログラムに組み込む。ワークショップ形式で、原則は８回連続、14人以下のグループで構成される。プログラム終了後の参加者の評価は非常に高く、出席率が高いことも特徴である。以下、Ⅱの項において詳細にこのプログラムについて報告する。

Ⅱ．NPプログラムの詳細と九州一円でのひろがり

（担当　古野陽一）

１．完璧な親なんていない！（ Nobody's Perfect Program ）について

(1)　歴史

1980年代のはじめ、カナダ保健省と大西洋４州の保健部局によって開発

1987年　カナダ全土に導入

テキストはフランス語・英語など。視聴覚障害のある親のためのテキストもある

2002年　日本語版テキストが国内で出版される。

同時にファシリテーター養成講座も実施され、国内での普及が始まる。

2004年　NP-Japan設立

(2)　基本的な考え方

①　親は自分の子どもを愛し、よい親になりたいと願っている。

②　はじめから一人前の親などいない。

③　親のニーズを満たすことは、子どもの要求しているものを満たせるようになるためのステップとなる

④　親は実際的でお金の掛からない前向きな方法を求めている

(3)　特徴

①　参加者がすでに知っていること、行ってることを土台にしている

② フレキシブルである→プログラムは参加のニーズによって計画される
③ 参加者が、相互にアドバイスやサポートをしあう関係を築く
④ 危機的な状況や、深刻な問題をかかえる家庭を対象にしたものではない

(4) ねらいと目的

① 親としての役割などについて安心して考えられる場を提供する
② 親が自分の長所に気付き、子育てのための前向きな方法を見つける手助けをする
③ 参加者が自分自身の価値観と向き合い、子育てを始め生活の局面にどのように影響しているかを知る機会を提供する
④ 体験を通して情報や洞察力を手に入れ、生活の様々な場面で応用できるようにする

(5) 参加者の目標

① 子どもの健康や安全、しつけについて学ぶ。
② 子育てのスキルを高め、新たなスキルを習得する。
③ 自分の長所や能力に気づくことによって、親としての自信をつける。
④ 学習しながら他の親と知り合ったり、くつろいだり、楽しんだりする。
⑤ 他の親とのつながりを深め、お互いに力になり、サポートしあえる関係をつくる。

(6) 基本的なプログラム内容

① 0～5歳の子どもを持つ親が対象
② 参加者のニーズに応じてプログラムを組み立てる
③ 毎週1回、2時間、8回連続で行う
④ 託児付き親子分離で実施
⑤ 10人前後の少人数で実施
⑥ テキストで必要な情報を提供し、さまざまな問題に対処できるよう手助けする

(7) テキスト

普及版 （三沢直子監修：ひとなる書房）

分冊版 （子ども家庭リソースセンター編：ドメス出版）

テキストはマニュアルではない。親に必要な情報を提供し、子育てで直面する問題にうまく対処できるように手助けするもの

内容は、親／しつけ（行動）／こころ／からだ／安全　の５つに分かれている。

２．キーコンセプト

(1)　互いの価値観を尊重する

①　人の価値感を変えることを目的としたプログラムではない

②　自分自身の価値観を認識するとともに、他者の価値観を理解する。

③　それぞれの価値感が日常生活にどれほど影響があるかを知る。

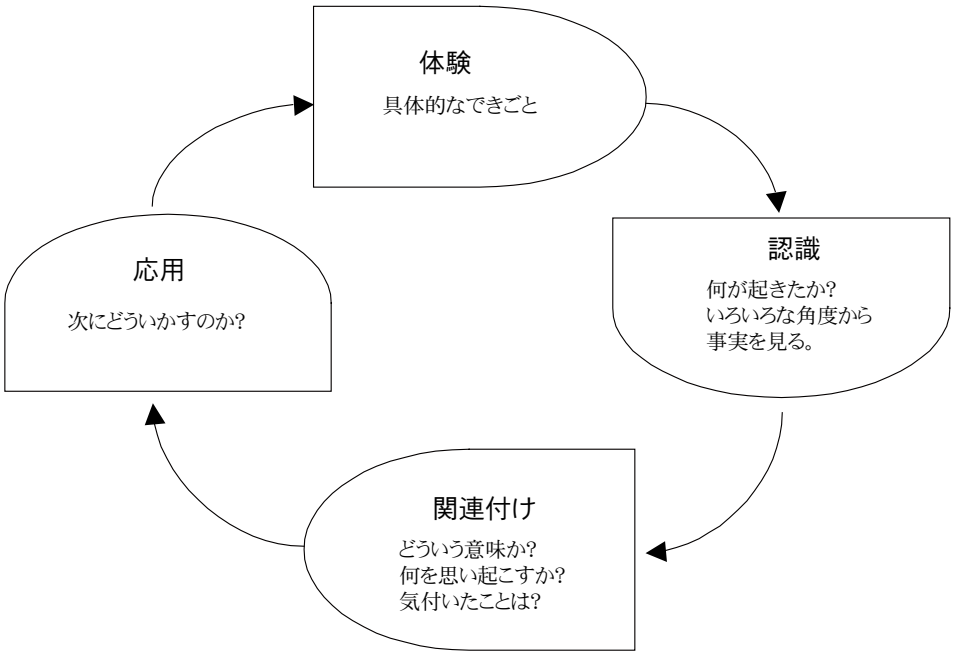
④　一人一人の価値感を大切にすることを学ぶ。

(2)　体験を通して学ぶ

参加者に何をすべきか、どうすべきかを教えるプログラムではない

体験を通して学んだ事を生活の様々な場面で応用できるようにする

◆体験学習サイクル



３．ＮＰが親にもたらす変化とその手法

(1)「孤立」の意味

①　それまで所属していた社会からの隔離。

結婚、出産を機に、いままで築いてきたものとは、別の人間関係が始まる。

→身に付いている「社会性」は家族・親族や地域社会向けのものではない。

②　できるだけ人と関わらずに生活することのほうが快適。

人との関係性を作ることに慣れていない。

→人に迷惑をかけることへの罪悪感

深い人間関係を持つことへのわずらわしさ、おっくうさ。

子どもを生むことによって、家族、親族、地域が、身をおく社会となる。

子どもは、家族、親族、地域という社会の中でしか育たないので、そこと関わりを持たざるを得なくなる。しかし、親は家族、親族、地域の中での自分の振舞い方が育っていなかったり、人と関係をする力そのものが育っていなかったりする。

(2) 地域社会性が段階的に育つ

日本におけるＮＰの重要なテーマは、孤立から自分を解放する力を身につけてもらう、ということになってくる。この力は、一足飛びには付かない。その過程は、新生児が大人になっていく過程に似ている。

１．世界が暖かく自分を受け入れてくれることの認識

２．安全と未知の領域の境界線の拡大

３．自我の主張－信頼関係のある他者の拡大

４．ギャングエイジ－仲間社会での個人の強化

５．大人社会への進出

孤立した親が、新生児と異なるのは、なんらかの社会に対しては、きちんと社会性を身につけており、一個の大人として振舞うことができるということ。

その経験を尊重し、地域社会においてもそれは生かせることを学ぶことで、短期間で地域社会に乗り出していく力が付く。

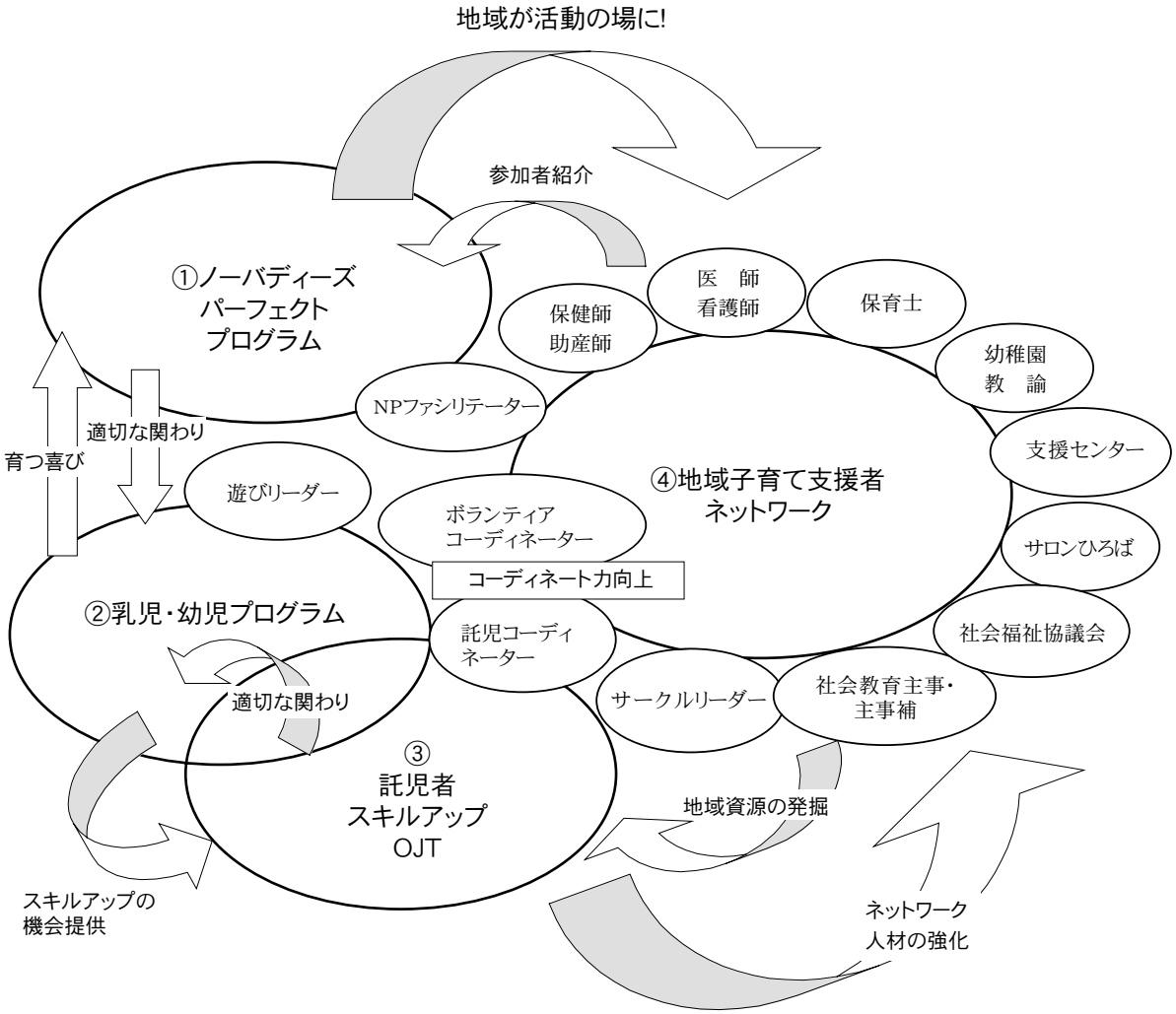
ＮＰは、８週間のプログラムの中で、１～４の環境を段階的に作り出し、親自身の成長を促す。

(3) ８週間のプログラム内容と親の社会性の成長

回数	セッションテーマ	親の状態	成長のポイント
1	・個人が尊重される自己紹介 ・ルール作り ・楽しい場	・警戒心のガードがある ・安全な距離を置いての他者との関わり ・自分を解放しない	・安全で何を言っても受け入れられる場であることを認識してもらう ・親を個人として尊重
2～3	・子どもの成長・発達段階 ・しつけについて	・子どものことを中心に話やすいことなら話せる。 ・異なる意見、自分の価値観を脅かす意見に反応→反発する、落ち込む、しらける ・意見の合う人どうしでの小集団形成	・安全性の高い環境 ・安全性の高いテーマ ・異なる意見のぶつかり合いを親同士の力で解決 ・親同士がお互いの状況を知り合うことで安心 ・小集団の尊重
3～5	・親自身の悩み ・感情を吐き出す	・ホンネを言ってもよい安心感 ・不満な気持ちが軽減される。 ・異なる意見、価値感を受け入れる余裕ができる。	・自我を主張してよい場。 ・この場に対するオーナーシップの形成 ・他者（仲間）の尊重 ・小集団からグループ全体の関係へ発展

5～7	・夫婦関係 ・家族との関係 ・子育てで解決したいテーマ （食事、睡眠、遊び、メディアとの関係） ・自分自身のテーマ （働くこと、お金、時間、自己実現など）	・安心して自分の話ができる ・他者の問題解決に取り組む ・自分の力の再認識 ・グループとしての結束→地域社会のギャングエイジ ・自発的に行動	・グループ内での個人の解放 ・他者に対する自分の力を認識してもらう ・問題を人の力を借りて解決する能力の向上 ・グループの結束力を高める ・グループが「心」のベースキャンプとなりうるように配慮
7～8	・地域社会との関係 ・これからの行動	・このグループの人間関係を継続したい ・このような場の維持 ・獲得したものの継続	・8週間の成果の認識 ・地域社会へのアプローチの準備 ・同窓会、サークル等の形成補助 ・問題解決能力継続のヒント

4．ＮＰをきっかけとした地域子育て環境づくり



(1)　1粒で4度おいしいＮＰプログラム

ノーバディーズパーフェクトプログラムは、託児つきで8回連続開催という条件があ

り、実施に際して予算面、人材面で苦労が伴うプログラムです。しかし、このプログラムの困難さは、地域の子育て環境づくりのきっかけと捉えなおすことで、子育て環境づくりのための４本のプログラムが同時に走る、大変有意義なものと成ります。

① ノーバディーズパーフェクトプログラム

乳幼児の親が参加するプログラム。保健師、助産師、医師、支援センターなどと連携を取ることで、本来このプログラムへの参加を期待している若年、貧困、シングル、多胎などリスク要因を抱えた親子を巻き込むことができます。

同時に、様々な子育て関係者と連携することでサークルリーダーや乳幼児を抱えつつ支援的な活動をしている親など、エンパワメントされる機会を欲している親子も巻き込めます。このようにして作られた参加者グループは、多様性がありＮＰを進めるグループとしては、高い効果が期待できるものとなります。

ＮＰでは最終的に、参加者グループが地域で活動する、地域の他の資源とつながる、というような形で、プログラム終了後の日常生活に帰って行きます。

そのとき、参加者に活動の場を提供するネットワークがあると、外に出て行く力を付けた参加者は、地域の様々な場面に顔を出せるようになります。

ＮＰは、親が経験から学ぶことを身につけ、自立を促すプログラムです。

参加者どうしの協力を含め、親自身が自分に必要なものを見極め、子育てをするようになっていきます。これによって、従来、保健師や医師、支援センター、ひろば等に過重に掛かっていた負担が軽減されることも期待できます。

② 乳児・幼児プログラム

③ 託児者スキルアップＯＪＴ

本プログラムの託児は、子どもたちも託児者も同じ顔ぶれで１週ごとに８回連続するという特徴があります。このことから、４つの効果が期待できます。

１）子どもたちが、託児者や他の子どもと適切な関わりを持つことで、発達、成長が促される。

２）託児者が連続的に子どもと関わることで、発達・成長を見通した子どもへの対応スキルをＯＪＴ的に身につけられる。

３）託児コーディネーターやボランティアコーディネーターが、託児者や遊びのリーダーなど地域の資源を掘り起こし、実際に活動してもらうための仕組みを作る機会となる。

４）コーディネーターや託児者が親とどう関わるべきかを学べる。

とくに、発達障害等の可能性がある子どもへの適切な対応を、医師、保健師等と相談し助力を受けながら体得していくことができます。

ですから、本プログラムの託児を、「親の学習中に子どもを預る」というだけの捕らえ方でなく、子どもの発達・成長を促す観点、託児者のスキルアップの観点で、それぞれ目的を持ったプログラムとして組み立てることができます。

④ 地域子育て支援者ネットワーク

ＮＰを実施することで、地域の子育て関係者で構成する地域子育て支援者ネットワークに、以下のような具体的な仕事が発生します。

1）参加者の紹介とプログラム終了後の活動の場の提供

2）託児者、遊びリーダーなどの地域資源の発掘とコーディネート

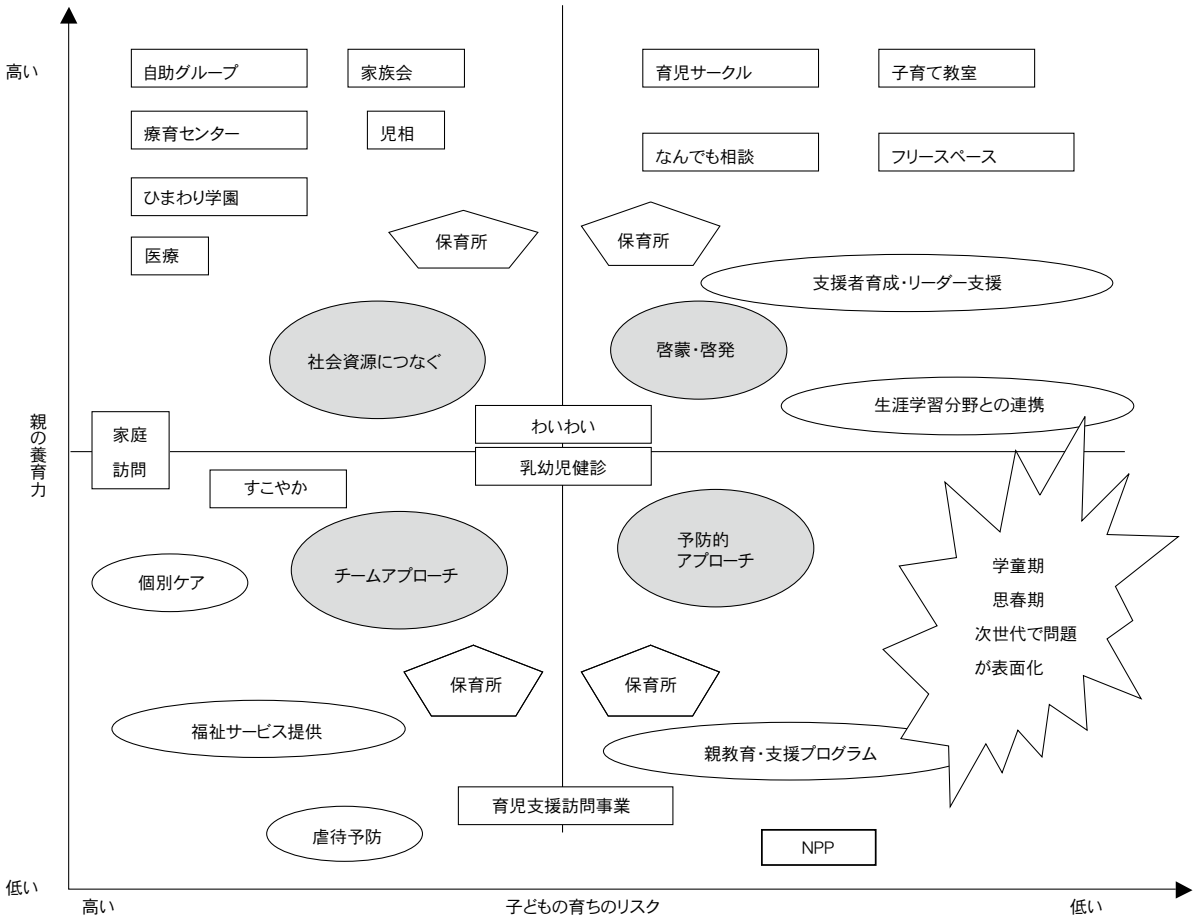
3）ハイリスクケースへの多機関連携

現在、いずれの地域でも図示したような支援者ネットワークの形態はあるものの、現実的な活動としては連絡会、学習会といったものに留まっていることが多いようです。

子育て支援者ネットワークをバックグラウンドとしてＮＰを実施することで、上記のような極めて具体的で、地域の子育て環境の改善に繋がる仕事が発生します。

具体的な仕事を通して、ネットワークの活動が活性化し、役割分担や連携が目に見えるようになり、人材層を厚くする、ネットワーク強化プログラムとして活用できます。

５．北九州市の母子保健事業マップとＮＰ



・北九州市で実施されている母子保健事業を「親の養育力」と「子どもの育ちのリスク」を軸にしてマッピングした（2005年　古野由美子）

・全般に親の養育力が高いことを前提とした事業に偏る

・子どもの育ちにリスクがある場合は、個別ケア、福祉的アプローチが機能し子どもの養育力が確保されることが多い

・親の養育力が低く、子どもの育ちにリスクが無い領域への支援がほとんど無い。

→乳幼児期は、問題が無いように通過し、思春期や次世代の子育てで問題が表面化すると推測される

→ＮＰは、この領域にもっともマッチする予防的プログラム

６．福岡県におけるＮＰ実施実績

日程	開催地	主催
2004年３月	北九州市	乳幼児子育てネットワーク・ひまわり
2004年５月～６月	飯塚市	いいづか女性ネットワーク子育て部会
2004年７月～８月	北九州市	乳幼児子育てネットワーク・ひまわり
2005年１月～３月	北九州市	乳幼児子育てネットワーク・ひまわり
2005年６月～７月	大野城市	ＮＰＯ法人チャイルドケアセンター大野城
2005年６月～８月	糟屋郡志免町	志免町子ども課
2005年９月～11月	北九州市門司区松ヶ江北	門司区生活支援課
2005年９月～11月	飯塚市	いいづか女性ネットワーク子育て部会
2005年10月～12月	古賀市	古賀新宮子ども劇場
2005年10月～12月	大野城市	ＮＰＯ法人チャイルドケアセンター大野城
2005年10月～12月	東峰村	東峰村役場住民福祉課・東峰村教育委員会
2005年10月～12月	稲築町	稲築町社会福祉協議会
2006年１月～３月	北九州市若松区深町	若松区生活支援課
2006年５月～６月	東峰村	東峰村役場住民福祉課・東峰村教育委員会
2005年９月～10月	宗像市	のびのびクラブ
2006年９月～10月	飯塚市	いいづか女性ネットワーク子育て部会
2006年９月～10月	嘉麻市	嘉麻市社会福祉協議会
2006年９月～11月	大野城市	ＮＰＯ法人チャイルドケアセンター大野城
2006年10月～12月	太宰府市	太宰府市家庭教育支援協議会、
2006年11月～12月	田川市	田川市教育委員会、田川市子育て支援センター
2006年12月～１月	糟屋郡志免町	志免町子ども課
2007年１月～３月	北九州市小倉南区吉田	おひさまのたまご

・福岡県では、当初、子育てネットワークなど市民団体主催で行われていた。

・昨年度は、門司区、若松区の生活支援課と市民団体の連携でモデル事業として実施した

→この形態が理想的と言える

（執筆者はともにＮＰＯ法人北九州子育ち・親育ちエンパワメントセンター理事）